死とその後

H・A・アイアンサイド著

DEATH AND AFTERWARD

by H. A. Ironside

伝道出版社

死とその後

H・A・アイアンサイド著

DEATH AND AFTERWARD

by

H. A. Ironside

LOIZEAUX BROTHERS
Neptune, New Jersey

Publisher

Evangelical Publishers
Tokyo, Japan

目　次

第一章　クリスチャンの死とその後……5
第二章　未信者の死とその後……21
第三章　霊とたましいとからだ……41

第一章　クリスチャンの死とその後

「クリスチャンは、死んだあと、いったいどうなるのでしょうか」。こう聞かれると、とまどってしまう信者が多いようです。しかし、この質問に答えるには、コリント人への手紙第二の四章一六節から五章一〇節までを考えるだけで十分です。その箇所を引用してみましょう。

「ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それを着たなら、私たちは裸の状態になる

ことはないからです。確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためにです。私たちをこのことにかなう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました。

そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています。確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです」。

この箇所には非常に対照的なものがたくさんあります。私はそれらを十二に分けて指摘してみます。もっと細かく分析すれば、その数はさらに多くなるでしょう。

まず第一に、「外なる人」と「内なる人」が対照的です。「外なる人」は人の肉体的・物質的部分のことです。「内なる人」は人の精神的・霊的部分のことです。唯物論（訳注：物質を根本的実在と

し、物質から離れた霊魂を認めず、精神や意識をも物質に還元してとらえる考え）を唱える者たちは、人間が精神的・霊的な実在でもある事実を否定しますが、五章一〇節はそれを断言しています。

二番目の対照は「衰える」と「新たにされる」です。人の肉体は衰弱します。私たちは生まれると同時に「死に始める」のです。しかし、内なる人は日々新たにされます。

四章一七節には、さらに明確な対照が三つあります。すなわち、「今の時」と「永遠」、「軽い」と「重い」、「患難」と「栄光」です。患難は、苦しみ悩んでいる聖徒にとって、実に「重く」、いつまでも続くもののように思われますが、聖霊はそれを「今の時の軽い患難」と呼んでいます。私たちは、「患難」と「永遠の栄光」（これは来たるべき代々にわたる私たちの相続分です）とを比較することによって、「患難」が「軽い」ものであるという事実を悟るのです。

六番目は「見えるもの」と「見えないもの」です（四・18）。「見えるもの」は「一時的」であり、「見えないもの」は「いつまでも続く」とはっきり述べられています。ここで対比されている事柄は、この章のテーマに関して非常に重要なものです。「条件的不死」（訳注：クリスチャンの霊魂だけが不滅なのであり、それ以外の霊魂は滅亡する、という考え）を主張する人々や、唯物論を弁護する人々は、新約聖書でふつう「永遠」と訳されていることばに、必ずしもそのとおりの意味があるとは限らないと主張します。しかし、ここでは、まさにその「永遠」ということばを「一時的」ということばと対比しているのです（訳注：新改訳は「いつまでも続く」）。「一時的」ということば

が「終わりがあること」を意味することは間違いありません。したがって、「永遠」ということばは「終わりのないこと」を意味しなければなりません。他の実例をいくつか調べてみれば、それが紛れもない事実であることを、さらによく理解できるでしょう。聖書には「永遠の神」「永遠の御霊」「永遠の贖い」「永遠の資産」とか、「永遠の刑罰」「永遠のさばき」といった表現が出てきます。「永遠」ということばが、良いものや神性そのものを指す場合と、悪しき者の刑罰に関して用いられる場合とでは、その意味が全く違ってくるなどと言えるでしょうか。みことばの権威を少しでも顧みる者なら、そのようなことを決して主張しないはずです。

七番目と八番目の対照は五章一節に見いだせます。すなわち、「私たちの住まいである地上の幕屋」と「神の下さる建物……人の手によらない、天にある永遠の家」です。一方は「こわれる」かもしれませんが、他方は「永遠」です。「永遠」ということばが用いられているのは（いま考えている箇所の中では）これで三度目です。ここでも、そのことばは「消え去るもの」、すなわち「終わりのあるもの」と対比されています。「一時的」なものは「こわれる」かもしれませんが、「永遠」のものは決して消滅することがありません。

続いて、「脱ぐ」と「着る」とが対照的です。「脱ぐ」は死のことを、「着る」は復活のことを指しています。復活のときに「死ぬべきものがいのちにのまれてしまう」のです。

最後の三対の対照は五章六節から九節に見いだせます。すなわち、「肉体にいる間」と「肉体を離

れて」、「見るところによって」と「信仰によって」、「主から離れている」と「主のみもとにいる」の三つです。

神の教えを待ち望み、これら一連の対照を注意深く熟考するならば、すでに救われている者の未来の状態を知ることは決してむずかしいことではありません。この箇所を全体的にもう少し詳しく調べてみましょう。

まず最初に注意しなければならないことは、「外なる人」と「内なる人」とを混同してはならないということです。「私」というものは「私の肉体」のことではありません。人間は「霊」と「たましい」と「からだ」とで出来ているとはっきり述べられています。からだは「外なる人」です。霊とたましいはともに「内なる人」を構成しています。霊は、知的存在のある所であり、たましいは、人間の感情的、情緒的な性質のある所です。霊とたましいは決して切り離せません。しかし、聖書はそれらをはっきり区別しています。すなわち、聖書の教えによれば、それらは別個のものでありながら、区別して考えることができないものなのです。

神の創造物として、人はみな、霊とたましいとからだとから成っています。しかし、主イエス・キリストを信じる者は、生来の人間が備えていないものを持っています。信者は、新しく生まれたとき、新しい性質を受け取りました。この新しい性質も「霊」と呼ばれています。それは「内なる人」の特徴です。「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。あなたがた

は新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません」（ヨハネ三・6、7）。

テサロニケ人への手紙第一の四章で述べられているとおり、御民を集めるあの号令とともに主イエスが天から下って来られた後も、私たちが肉体を持って生き続けたとしたら、私たちは肉のたどる道をたどらなければなりません。ですから、「私たちの住まいである地上の幕屋」は「こわれ」なければなりません。すなわち、からだは死ぬのです。そのとき、信者の状態はどうなるのでしょうか。私のからだが死の眠りにつくとき、私の「内なる人」もからだの中で眠りにつくのでしょうか。それとも、からだを去って別の世界へ昇って行くのでしょうか。

この問いに関する聖書の証言は、どれもこれも明確なものばかりです。からだは「内なる人」が住む「幕屋」にすぎません。「幕屋」は壊れるかもしれませんが、その人自身は肉体から離れます。使徒パウロはこの箇所で明らかにその事実を教えています。使徒ペテロも次のように記しています。

「私が地上の幕屋にいる間は、これらのことを思い起こさせることによって、あなたがたを奮い立たせることを、私のなすべきことと思っています。それは、私たちの主イエス・キリストも、私にはっきりお示しになったとおり、私がこの幕屋を脱ぎ捨てるのが間近に迫っているのを知っているからです。また、私の去った後に、あなたがたがいつでもこれらのことを思い起こせるよう、私は努めたいのです」（Ⅱペテロ一・13―15）。